キヨミズ准教授の法学入門

木村草太著 星海社 2012 (星海社新書)

法科大学院教授　**野村 秀敏**

　大学に入学した新入生は法学とか法学入門、法学概論、法学通論といった名称の講義を履修する機会を与えられるであろう。とりわけ法学部の新入生であれば、これから学ぶ法律学の基礎を教えてくれる科目として、期待をもってその講義に臨むに違いない。しかし、昔から、そのような期待は数回授業に出席するだけで裏切られるのが定番であった。このような科目は、法の概念・法解釈の方法論・法命題の構造・法秩序論といったテーマで非常に抽象的な議論を展開するか、憲法・民法・刑法や知的財産法といった各法分野のさわりを並べるだけの講義であることが多い。前者のようなことは、法律学について未だほとんど何も学習していない者にとって何のためにそんな議論をするのか理解できないであろう。後者のことは、多少は内容を理解できたとしても、無味乾燥な骸骨の羅列としか思えないのではないか。受講生がたちまちのうちに興味を喪失するのも、あながち責めることはできないように思う。

　かくいう私も何十年か前には上記のような法学部新入生の１人であった。また、それから数年後、私が大学院生の時代であったと記憶しているが、著者の生涯の研究の集大成との大々的な宣伝の下に、ある大手有名法律出版社から、法律学の神様とまで言われた著名な法律学者の手になる法学概論という本が出版されたことがある。そこで、さっそく宣伝につられて本を購入して読んでみたが、学問的な評価はいざしらず、内容的に眠気をさそう本であることには、それ以前に読んだ同種の本との間に何の相違もなかった。

　この時以来、法学とか法学入門とかいった類の本は読んだことはない。しかし、この本は違う。大変分かりやすい。形式は、高校２年生のキタムラ君が、時にその友人も交えて、法哲学者のキヨミズ准教授とその同僚で知的財産法が専門のワタベ准教授から、様々な機会に、法学などの講義科目の内容として上に示したようなテーマについて話しを聞くというスタイルをとっている。イラストなども入っている。また中身は、高校生にも分かるように明解である。たとえば、法的三段論法の意義について、裸の価値判断との違い（ということの意味や、そもそも法的三段論法とは何かについて知りたい人は自分でこの本にあたって下さい）を日常的な例を引いて具体的に述べている。若手の憲法学者である著者は、「高度な内容を分かりやすく」を信条に講義をしているそうでるが、その狙いはまさに本書において実現されている。もっとも、その明解さは物事を割り切りすぎているところから来ているようにも思えなくもないが、本書は法学入門のそのまた入門という性格の本であるから、それで差し支えないとすべきであろう。

　ともあれ、法律学を学び始めたばかりの人に本書を勧める。法律学のおもしろさを十分伝える本である。この本を読んで、様々な法分野をより詳しく学ぶ意欲を掻き立てられる人が出てきてほしい。著者もそう思っているに違いない。なお、著者のインタビュー記事がインターネットのザ・ジセダイに「若き憲法学者・木村草太先生に、『法学のマインド』を学ぶ！」(http://ji-sedai.jp/special/kyokan/KimuraSouta.html）として掲載されているから、興味のある人は是非見てほしい。